

エティエンヌ・デュモンを中心とした ヨーロッパ社会経済思想史研究

喜多見 洋
Hiroshi KITAMI

ベンサムの見解の普及、代弁者、もしくはミラポールの協力者として知られているジュネーヴの思想家エティエンヌ・デュモンは、今日抱かれている彼の一般的イメージ以上に興味深い存在であった。とりわけ社会経済思想史において、彼は、その生涯が示すように興味深く、かつ重要な存在であった。本研究では、ジュネーヴ大学公共図書館、ローザンヌ大学ワルラス・パレート研究センター、スイス・ロマンダのアルシーフ、フランス国立図書館、リヨンのワルラス・センター、一橋大学社会科学古典資料センター等が所蔵する図書、マイクロフィルム、古版本、マニュスクリプト、書簡などを利用してこれをもとにまず J. B. セー、T. R. マルサス、J. C. L. S. シスモンディ、G. ガルニエといった同時代の経済学者とデュモンの知的交流を検討した。これにより明らかになったのは、デュモンと同時代の経済学者達の親密な交流である。とりわけセーとの交流には注目すべきものが見られた。デュモンとセーの交友関係はフランス革命期のパリにさかのぼるが、上記の資料をつうじた分析から、特にナポレオン失脚後の二人の親密な関係がセーと功利主義の関係に大きく影響を及ぼしていることが明らかになった。そしてデュモンの晩年までこのデュモンとセーの関係は変わらなかったし、さらにこの二人の関係は、シスモンディとセーの関係にも影響を及ぼしている。今後、ベンサム関連の資料の公刊や『J. B. セー全集』の刊行を契機として種々の文献や資料が容易に利用できるようになる。そして更に多くの興味深い事実が明らかになると思われるが、18 世紀末から 19 世紀初めにかけてのヨーロッパ社会経済思想の展開のこのような側面には、セーの「古い友人」であるジュネーヴのデュモンが関わっていたという事実はさらに重要な意味を持つてくるとと思われる。なお本研究の成果は、以下に発表された。

Hiroshi KITAMI, "Jean-Baptiste Say et Etienne Dumont", *les actes du Colloque International Jean-Baptiste SAY*, Economica, 2002,